



# 輝き人生

このコーナーではきらりと輝きながら活躍する市民を紹介します。

## 芸は人なり

はやしや きくまる  
林家菊丸さん



扇子で箸や筆、手ぬぐいで本や財布などを表現し、落語には欠かせない小道具。

亀山市文化大使で、本市出身の落語家の林家菊丸さん。長年継承されてきた古典落語から、新たに生み出された創作落語まで幅広くこなし、特に女性の演じ方には定評があります。入門20年目の昨年9月、上方林家一門の大名跡「林家菊丸」を三代目として約115年振りに襲名。3月15日(日)には、市文化会館大ホールで襲名披露公演が行われ、故郷に錦を飾られます。

### 一落語を始めたいきっかけは？

「祖母がラジオで落語を聞くのが好きで、小学生の頃、お客さんがドッカンドッカンと笑っているのを聞いたんです。“なぜ、そこまで大人たちが笑うのかを知りたい”と落語に興味がわきました。ラジオを録音して繰り返し落語を聞くうちに、少しずつ覚えて面白さが分かり、自分でもやりたくなってきたんです。友達の前で落語をしたら笑ってくれて、それがうれしくて快感になって。すっかり落語にはまり込んでいましたね。」

### 一平成6年、20歳で林家染丸師匠に入門。

「高校卒業後に入門したかったのですが、先生や親に反対され、大阪の大学に進学しました。でも、大阪は毎日寄席をやっていて、寄席通いの生活。やりたいことは早く始めた方がと思い、親に手紙を書いて納得してもらいました。入門して林家染丸と命名され、2年間の修業後に独り立ち。あるとき、移動中に100万円を拾ったことが新聞や番組で取り上げられ、少しずつ名前が売れていきました。

最初は、ずっと古典落語をして

いましたが、5年ぐらい前に伸び悩んでいるなど感じ、六代目桂文枝師匠に手ほどきを受け、創作落語を始めました。自分で落語をつくると、構成力や発想力が身に付き、古典落語をする上でもアレンジを加えることができるようになり、一皮むけた感じがしましたね。大きな落語会に抜擢で入れていただいて活躍の場も広がり、3年前に、染丸師匠と兄弟子から菊丸を襲名しないかと薦められました。」

### 一どんな気持ちでしたか？

「正直、自分でいいのかと不安や迷いもありました。でも覚悟を決めました。人生の上で親同然の染丸師匠への親孝行として、菊丸の名前を復活させ、さらに林家一門を大きくするのが使命だと。」

### 一落語のときは何を大切に？

「お客さんのことを一番に考えます。高座に上がって、本題に入る前に話をしながら、どんな話がお客さんに合うかを直前まで見極めます。笑いだけでなく、人情噺で



ちょっとほろりとさせられたとか、お客さんに来てよかったと満足していただきたい。」

### 一菊丸さんにとって落語とは？

「子どもの頃は夢でしたが、仕事となった今でも夢や目標を持って落語をしています。いつまでも“覚めない夢”なのかもしれませんね。また、落語には落語家の人間性が表れます。“芸は人なり”この言葉は自分の目標でもあります。人生修業を積み重ね、人間性ととともに落語をさらに磨いていきたいですね。」

### 一故郷亀山への思いは？

「南鹿島町に住んでいたので、夏は鈴鹿川でよく遊んだりして、思い出もたくさんありますよ。最近では、恩師や同級生が中心となって後援会も立ち上げていただき、皆さんからの温かい応援や励ましが自分のパワーやエネルギーの源になっています。あらためて故郷への思いが強くなり、距離もぐっと近くなったと感じています。また、市内で定期的に寄席をして、寄席文化を広げていきたい。子どもたちが知らない芸能の非日常な世界を見せたいです。」

### 一いよいよ亀山市での襲名披露公演が近づいてきました。

「私にとってけじめとなる一世一代の大舞台。1年かけて全国20数カ所で公演を行っています。亀山での公演は特に思い入れが強く、とても楽しみです。襲名披露公演をご覧いただく機会は中々ないことだと思いますので、伝統芸能の様式美をぜひ楽しんでいただければ。アットホームで和やかな雰囲気での公演にしたいですね。」